新連載

家をして人生を語らしめよ

#1 記憶装置としての家

建築研究所
主任研究員　水上 点睛

以前、「下種の期間」と題して、セルフビルドの家づくりの顛末を連載させて頂いた。有難いことに、日左連HPの「左官ライブラリー」でバックナンバーが公開されることとなった上、今回再び連載のオファーを頂いた。今年、父の13回忌を迎えることもあり、次に紹介する、父との土壁にまつわる想い出の一端から、「家をして人生を語らしめよ」と題して、壁にまつわる物語を紹介する連載としたい。

福井県の山裾で農業を営む父は、わずかな時間を見つけては、夜行バスに乗って茨城まで、家づくりを手伝いに来てくれていた。故郷から遠く離れた土地で、息子が家を構えることに、恨み言の一つでも言いたくならなかったのか、今では不思議に思われるが、そんなそぶりはついぞ見せなかった。

骨組みや屋根瓦は、元の洋館の部材を再利用することとして、運搬できずに剥がした壁は、現地の土を使って新しく土壁でやり直すこととした。竹を割って小舞を編み、ふるった土と藁を器用に混ぜながら、大工でも左官でもない父が誇らしげに言う。

「農作業でトマトの支柱を立てたり、稲の苗床を作る作業と一緒だ。わけないよ。」

そうかと思えば、土壁をならそうと押し付けた鏝に、かえって土がくっついて、壁から土を引きはがしてしまう様子を見て、今度は私がからかう。

「昔、雪山で教えてくれたでしょ。スキーのエッジを立てると転んでしまうのと一緒だよ」

電動工具を用いない静かな林の中での手作業は、大学で地元を離れて以来、疎遠になっていた父との間に、再び会話を楽しむにはもってこいの時間となった。

しかしそんな時間も長くは続かず、父は余命宣告を受けてしまう。自分の身体より、まだ私の家が完成にほど遠いことを憂い、父はつぶやいた。

「お前も相棒がいなくなると困るなぁ」

その言葉に、私たちの関係が時を経て、親子から相棒に移り変わっていたことに気づかされた。そして残された時間が迫る中、私は父の手を引いて、人目につかない階段の登り口に案内し、塗ったばかりの土壁に、手を押し当ててもらった。160cmに満たない父の、ごつごつして私よりも大きな手。擦りむいて泥にまみれて生きてきた父の人生を、口下手な父に代わって物語る手。土壁にうつされた父の手形に触れるとき、私はいつも励まされ、また自らを問い正している。

「この手は、この人生は、父に近づけているのだろうか」と。

写真１　竹小舞を編む父

冒頭の父の手形や、柱の傷はおととしの～♪で始まる童謡「たけくらべ」の歌詞のように、壁や柱が、そこで営まれる生活の記録媒体、さらには記憶の端緒となることが往々にして見られる。このように家を記憶装置とみなすことで、湿式材料である土壁や漆喰といった左官材料の魅力が増すのではないだろうか？

大正洋館を移築することに決め、外壁のモルタルや内壁の漆喰をはがし、仕口やホゾを傷めないよう

写真２　土壁のバッテリーチャージャー

に、手壊しで解体した軸組が積まれていく。その横で、年配の大工から、

「あぁこれはタイヒだなぁ」との声が漏れた。

白蟻が入ってしまって、堆肥のようにホケてしまっているのだろうか？と心配になって走り寄る。

すると「この甘い香りが分かるか？これは台湾ヒノキに間違いない。大正の時分には、日本にあまり大径木が無く、一方で台湾には、手つかずの森林が残っていたそうだ。」と教えてくれた。

ご家族からは、「当時の当主が、台湾帝国病院の院長として赴任する際、馴染みの大工を連れていき、任を終えて帰国後に、彼をしてこの洋館を建てしめた」と聞いていたので、おそらく現地から台湾ヒノキを材料として持ち帰ったのだろう。同時代の1920年に創建された明治神宮でも、鳥居や神殿などに台湾ヒノキが使われているそうだ。

100年前の木材であっても、依然として、その樹種が判別できるくらいの香りを発しているとは驚くべきことである。また家を香りで鑑賞するという行為は、雨上がりのアスファルトの香りが、子供の頃夏休みに通ったプールを思い出させるように、懐かしさを誘う不思議な感覚を与えてくれる。その甘い香りに秘められた洋館の生い立ちを想像して、家がタイムカプセルのように感じられた一幕であった。

移築後の洋館では、その柱梁で囲まれた枠内に土壁を塗り込んでいる（写真３）。更に拡大した写真２で、柱梁と土壁の間に５分（15mm）の瓦桟で額縁がめぐらせてあるのを見て頂ける。土壁は柱のちり際が、乾燥収縮により隙間があきやすい。隙間風を防ぐため、ちり際には、のれんやひげこと呼ばれる土壁の付着性を上げる小道具が使われたり、柱に溝を掘って断面形状に凹凸をつけ、土を内部まで塗り込める工夫がなされる。我が家では、柱の溝切り

写真３　移築後の洋館

に代わり、額縁上の木桟を四周に回して同様の断熱効果を得ようとしたが、せっかく手間をかけて取り付ける額縁であるから、意匠上の効果も狙って、色を付けることにした。

何色にしようかと考えているとき、印袢纏を作る際にお世話になった呉服屋の女将に面白い話を伺った。

普段着る洋服と違って、「着物と帯の合わせ方が難しい」という話をすると、

「洋服のように、無難にしようと無地と無地を合わせるのがいけない。」

「着物は形にデザインがないため、柄と柄を合わせる等、布の色柄の組み合わせで表現する衣装なのです」と教わった。

更にその話をよく行く日本料理屋の女将に話すと、黒い帯の魅力について語ってくれた際に、

「黒い帯は１回赤に染めてからでないと、本当の黒は出ないんだよ」

と教えてくれた。それを聞いてピンときた。「黒」という漢字の中に既に「赤」が含まれていたのだ（上部の田を除いたものは赤と読める）。私の名前にある「点」の字は、旧字体だと「點」と書く。「点（とも）す」と読むようにこの字は火に関係し、黒い炭に赤い火が宿されていることを物語っているのだ。火の研究を担うことが宿命づけられていたかのように思わせる気づきに心を弾ませて、額縁を弁柄で赤く塗ることにした。

父の手形の触覚、タイヒの柱の嗅覚、黒ずんだ柱梁を際立たせる弁柄の視覚―五感をフル動員というよりは、さりげなく刺激して、家や壁の背後に塗り込めた物語に、訪問客をいざない、奥へ奥へと歩ませるような家。そんな家づくりができればと思い描いている。

最後に父との想い出にまつわる話をもう１つ。農閑期を見計らって手伝いに来てくれていた父は、毎回持ってくるのは大変だと、一揃えの作業服を置いていっていた。一周忌が終わり、父の洋服をそろそろ片付けなくてはと思い、段ボールを開けたが、涙があふれてどうしても捨てることが出来なかった。とはいえ小柄な父の洋服を私が着ることもできず、思い悩んだ末に、布地を別の形で、本の表紙として仕立て直そうと思いついた。昔、おばあちゃんが、小さくなった毛糸のセーターをほどいて、帽子に編みなおしていたように。

それから布地を丁寧に切り離し、和紙を裏打ちして、想い出深い本の表紙を、次々と製本していった。小さい頃、文字通り穴が開くほど読んだ「はらぺこあおむし」。姉と肩を寄せ合って指差しした「からすのパン屋さん」。未知なる世界への冒険にあこがれた「ピノキオ」。やさぐれた思春期に涙した自分に驚いた「一杯のかけそば」。走る喜びと約束の大切さを知った「走れメロス」。木舞の編み方に悩んで父と開いた「ひもとロープの結び方」。こうして新たな装いをまとった本で、空虚だった壁面が彩り鮮やかに染まっていくに従って、父が、というよりは父の思い出が、寄り添っていてくれている感覚に包まれ、父を失った悲しみも薄らいでいった。

今では、父の洋服だけでなく、読んだ内容や当時を思い出させる色や柄で、布地や見返しに使う紙をコーディネートできるように、手芸店や文房具屋さんで布や紙を集めるようになった。こうなると仕立て直しそのものが楽しくなる。そして、素材探しに新しく本を読む回数も増え、また取り合わせを見てもらいたくて、製本した本を周りの人にプレゼントするようになった。

我が家には、こうして出来た製本を壁面一杯に飾る本棚がある。本の布表紙がタイルのように壁面を彩るだけでなく、この本棚は固定化されていないため、読書のたびに、そして家を訪れた客人の好みに合わせて本を見立てて、旅立つ本があるたびに、絶えずパターンを変える。まるで家が生きているかのように。オスカーワイルドの「幸福な王子」という童話をご存じだろうか？円柱の上に建てられた王子の像が、困っている人々に、自由に動けるつばめの力を借りて、刀や首の飾りを、終いには彼の目であるサファイアを届ける話である。これに端を得て、「Happy Prince Bookshelf」と名付けている。

今回は、家を記憶装置と見立てて、家づくりの過程で影響を受けた様々な知識や経験を、壁に埋め込んでいく話を紹介した。あたかも、パソコンで内部の記憶容量が足りないために、外部ストレージを利用する行為の如く、記憶のアウトソーシングとして家を使っているように受け取られたのではないだろうか。私も初めはそのように考えていたが、データで保存が可能な外部ストレージとは異なり、記憶を家に落とし込む場合、何かしらかの形を与える必要がある。従来の物をストックするためのスペースづくりではなく、時間的要素が強い記憶に、空間的座標を与えていく行為を建築と呼べないだろうか？例えば、樹木の年輪が、経験した周囲の環境の変化を、年々刻々と縞模様で表すように、家をして人生を語らしめることができないか考えている。

家を芸術作品に高めようと考えているのではない。私が取り組んだ家づくりでは、自分より前に生を受けた大正洋館の、移築・復元を目指すことで、家を自分の作品として見る感覚は育たず、むしろ「家に育てられる」という感覚が養われた。家と人が相互に影響しあうような関係性を見出したいというのが、本連載の趣旨であり、しばらくお付き合い頂ければ幸いである。

写真４　Happy Prince Bookshlf